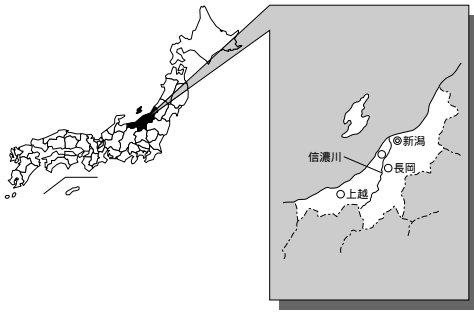


土木紀行

郷土の宝 大河津分水

越後平野の発展の礎 大河津洗堰

新潟県燕市



越後平野はかつて潟や沼の多い広大な低湿地で、信濃川の流は幾筋にも分かれて曲がりくねっていました。ひとたび信濃川が氾濫すると、家や田畑は水に浸かり、長い間湛水するため赤痢やコレラ等伝染病が流行り多くの人の命も奪われました。繰り返される水害をなくすため、人々は信濃川を分水し、洪水を日本海に流す「大河津分水」の建設を幕府や政府に訴えました。「大河津分水」の思想は子から孫へと受け継がれ、やがて国を動かす大きな運動となって実を結び、1907年（明治40年）大河津分水路工事が着手されました。規模の大きさと工事の難しさから当時「東洋一の大きな大工事」「東洋のパナマ運河」と称された工事は、15年の歳月と多くの労力を費やして、1922年（大正11年）に通水、補修工事を経て1931年（昭和6年）に完成しました。

大河津分水の分派点には、洗堰と可動堰が設けられ、平常時は信濃川下流域の生活用水や農工業用水を洗堰を通じて供給し、信濃川下流域が洪水時には洗堰を全閉し、可動堰から分水路を通じて上流の流水を日本海に流します。大河津分水の完成と、さまざまな治水の取り組みにより、越後平野の水害は大きく減少し、かつて悪水に苦しめられた水田は、豊かな実りを得られるようになり日本屈指の穀倉地帯へと発展しました。また、交通網の整備と産業の発達にも貢献し、大河津分水は越後平野発展の礎となりました。

大河津分水の主要な施設である洗堰は、総幅員145.4m、27径間、電気移動起重機により高さ2.3mの鋼製ローラゲートと30cm角の角落し材を昇



写真 1 完成当時の洗堰

降させ、オーバーフロー方式で水量調整をする近代的な分流堰として1922年（大正11年）に完成しました。その後、信濃川の流量改定に伴い1955年（昭和30年）から5カ年で堰柱を2.2m高上げ、ゲートについては鋼製2段扉ローラゲートによる中間フロー方式にするとともに、開閉装置をワイヤ

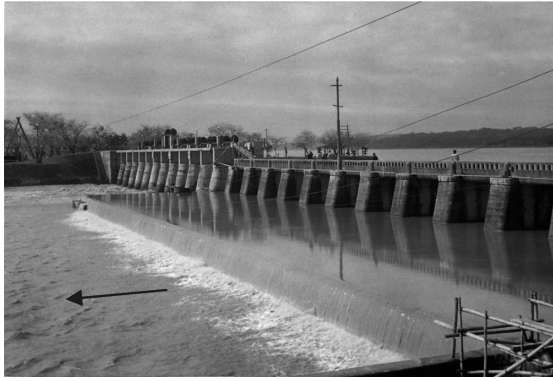


写真 2 昭和33年嵩上げ工事中の洗堰
奥の右岸側より嵩上げ工事を実施

ロープウインチ式に改良，さらに1966年（昭和41年）にはゲート型式をローラゲートのアンダーフロー方式に変更しました。

建設以来永きにわたり越後平野を潤し，洪水から守り続けてきた洗堰も，80年近くが経過し堰下流の河床低下や，堰自体の老朽化が著しく進行し，1982年（昭和57年）9月の洪水では右岸取付橋台等から漏水が発生するなど安全性が問題となりました。このことから，1992年（平成4年）に右岸上流部に新しい洗堰の建設が始まり，2000年（平成12年）5月に新・旧洗堰の切替えが行われました。旧洗堰は堰上流側が堤防で締め切られ，以前の姿のまま保存され2002年（平成14年）文化庁の「登録有形文化財」として指定されました。現在も周辺の大河津分水公園とともに地域の方々に親しまれています。また，2009年（平成21



写真 4 越後平野を守る近代化産業遺産「大河津分水」



写真 3 改築前の旧洗堰

年）には，大河津分水がこれまでの越後平野発展の礎となった治水の歩みを物語る近代化産業遺産群として，経済産業省の「近代化産業遺産」に認定されました。

大河津分水では，現在老朽化が著しくなった可動堰の改築事業が進められています。今後も大河津分水は，郷土の宝としてその歴史を伝え，地域の安全安心を支えて越後平野のさらなる発展に寄与していくことでしょう。



写真 5 登録有形文化財の旧洗堰



写真 6 平成12年通水した新洗堰